

● 高澤良一 第五句集 鳩信

● 白帝

烏瓜開花頗る珍にして

惘然齊藤史たる鷄頭に似て史の歌

物数奇がかうじて雀蛤に

あはててはいけない柿を滑る蜂

出し柴田宵曲文集洗る本こそよけれ長き夜に

長き夜を読ませる宵曲妖怪譚

夜長咄狐が人を騙す型かた

長雨に櫻もみぢの目減りして

コスモスや奥羽に廻る碧梧桐

秋雨といふ長雨の至り方

枯れに入るものの一つに床擦れも

曼珠沙華突撃バンザイ花にして

烏瓜失せたる色を思ひつゝ

咳き込めば臟腑七転八倒す

柿色に降り注ぐ日に蜂降れり

コスモスの人ひと気なければ昇天す

コスモスの佳人の如きたたずまひ

コスモスに遠ざかりゆくをみなごゑ

睡蓮の四方の水面ぴらぴらす

会心の音色きちきちばった翔ぶ

かがよへる水の回廊あめんぼう

諸堀の意を強うせる風が吹き

風邪貰ふ妻は何でも欲しがり屋

ほうほうの体で逃げ出す咳地獄

流行風邪吾が屋台骨揺らすなり

あつあつのけんちん汁に風邪抜かん

釘抜けば悲鳴をあげぬ鴟日和

秋燈^{懐旧}下勢ひし日には勢ひし書

とかとんと金槌振ふ敬老日

鶏頭の今年の種を見せに来る

こんなにも朝昼晩の風邪薬

居直れる風邪を追い出す粉薬

店頭の本に目利きの要る秋ぞ

足が向き神田古本まつりかな

山妻に風邪移りたる移したる

飛び方が目に見ゆきちきちばった翔ぶ

咳をする奴は不埒といふ目付

挿し芽してつきたる菊と聞かさるゝ

二軒目の八百屋に在りぬラ・フランス

折角の月の供へとはなれり

麗しき石榴新作見る如し

ピアノラのタンゴ魂露と凝り

納棺の泪は菊の蓄ほど

二階にて目覚まし鳴りぬ文化の日

日差しにも奥行のある稲架襖

石路浄土金ンのくしゃみをしたりけり

女郎蜘蛛金龍院の空を降り

どうかうもなく山茱萸の醜^{しこ}もみぢ

暖房の音みしみしと試し焚き

柿落ちてたうたう一つ日の入り際

狗尾草^{えのころ}の魂^{たま}のぬけがら枯月夜

水鳥の日がなびしゃびしゃやあってをり

永田耕衣逝く

トラトラトラ！耕衣俳句は奇襲もて

何事も先手取るべし十二月

書きとめてそれ清書して十二月

冬物を著るといふより身を容るる

唐突の真紅がよけれ猩々木

ポインセチア飾り立てつつ「主は来ませり」

小春日に水栽培の根が出たか

おだてには乗ってみるもの猩々木

菊花賞菊に係わりなき人出

ポインセチア十鉢並べて景気付

油断して地を擦るまいぞ千歳飴

ぽっくりのしゃんしゃん歩き七五三

日の差しておべぽかぽか七五三

祥啓の耳毛の達磨お風入れ

牧谿猿蟹捕へんと身を乗り出す
室町水墨画展

滝に皺入りて雪村観瀑圖

暮雪の軸雪村八十二歳筆

直伝の型歴然と蘆鷺圖

近景に巨岩を配す冬景色

着膨れて解説雪村鼻頂かな

錦蛇野毛山動物園暫し見てゐてのぼせけり

冬の日に駱駝の鼻先白っぽく

網目キリンに木の葉旋回して落ちぬ

檻抜けておこぼれ頂戴寒雀

檻隣りホンドキツネのお忙氏

丹頂に日本の色極まれり

郷土史に明るき人と石踏をみる

柿の家スウィングズビズビダバダバと
見えてゐるものが全てやいぼむしり
大接近ワクワクドキドキ流星群
紅葉山人語鳥語に匹敵す
草の繁何時までつづく有頂天
てのひらで押さへて咳の震源地
ちよつとしたことではいさかひ返り花
寒鯉の水押す力鈍りたる
けふの段取り朝の蒲団の中にあて
よく喋る女マスクで蓋をせん
落葉日に日に少くなりて朝の舗道
あまりにも人間臭きくわりんの實
歳旦吟作り今からそんな莫迦な
ひざら貝冬ざる身を張り詰めて
同人会忘年会と金嵩む
鈴懸の尾羽うち枯らすまでのこと
新聞を裏返す音文化の日
花八つ手瞬くやうに朝が来て
水鳥の水破る音夕間暮
鴨着水ざんぶとやってみせにけり
木の實弘明寺十一面観音立像どき鑿目を残す観世音
唐物相模 金沢六浦に三艘といふ地名ありてを揚げし湊や秋風裡
厚着して俳句はこの眼この脚で
爛酒にさようさようと応ず人
本郷の学生寮の枇杷咲けり
一政の上目使ひの鯉かな
蕎麦啜る音に人品骨柄出づ

鳥ごゑの弾ける如し白隠忌
壁いちまい抜け来る咳に力あり
コアラは初冬のユーカリの葉をよく噛んで
烏瓜どうせ採るなら器量好し
木の実落つダーウィンレアは真顔にて
へべれけのお手を拝借年忘れ
罷り出て精霊ばったの御曹司
首筋のすうすうオーバー羽織り初め
掌を組んで目つむる車中極月へ
大幅に賀状絞るか思案月
新年を迎へる櫛の瘤だらけ
立て込んで検尿 採血 咳 患者
梅鶯の南部坂聴き早や師走
耐寒性さくら草にて花果敢
金目鯛よく見る為の大きな目
まはりから徐々に片付き木守柿
プールサイド雨の落葉のわっさわっさ
寝支度の電気毛布をぬくめに行く
数え日の雑用買って出ること
鴨の名にいやに詳しき女ゐて
じたばたのじたの師走のちんどん屋
じたばたのばたの大つごもりなるよ
ほかならぬ妻の頼みの煤払ひ
高張を要所要所に義士祭
それはまたそれでけっこう長火鉢
湖上に降り鴨の比良組比叡組
殲滅の白山茶花でありにけり

鳩は潜水精進吾は句精進

百千の鴨の一つとなり湖上

傾城も^{羽子板市}手玉に取られ羽子板市

売り顔も商ひの内羽子板市

一生もの羽子板なりと売り口上

志ん朝の買札付きぬ羽子板市

横顔の誰ぞに空似羽子板市

羽子板市東都ツアーに組み込まれ

ちよつくら前ごめんなすって羽子板市

二代目も笑顔で対す羽子板市

灯が点いて寝ずの商ひ羽子板市

一回りして元の店羽子板市

角店の助六よかり羽子板市

羽子板の値踏み群がる頭越し

ねずみ小僧見得切る羽子板それがよし

置炬燵出てがさ市の客相手

落葉も*山東京伝机塚句碑 耳もそこね足もくしけてもろともに世にふる机なれも老たりて机塚埋めん合点じや

机塚あたじけなしの冬日差し

橋越へて水もしたたる都鳥

心臓の鼠鳴きする寒さかな

酒やれば風が募りて松葉蟹

さそひには口を濁して年忘れ

一病を持ちて海鼠の類ひなる